

成願寺

連載・七百回大遠忌を迎えた大本山總持寺御開山

瑩山禪師を讃仰して

福井県龍泉寺住職 山口正章

来年（令和六年、二〇二四年）は、曹洞宗大本山總持寺（横浜市鶴見区）を開かれた「瑩山紹瑾禪師」（以下、禪師と称します）の示寂七百回忌に相当します。そこで今回より四回にわたり、禪師についてのご紹介をいたします。



開山堂に安置されている瑩山紹瑾禪師像

季報

138

令和5年12月18日
(2023年)

目次

「瑩山禪師を讃仰して」 山口正章	1
開基鈴木九郎祖先の地、鈴木屋敷再建の報告	6
山内短信	8

納めの観音（年末の会）のお知らせ

十二月十八日（月）午後二時より、観音堂に於いて納めの観音様の縁日法要を執り行います。法要後は書院にてお話と軽食懇親会を予定。説教 静岡県東泉院副住職 金田祥道師
会費 三五〇〇円

*軽食の注文数の確定のため、予約をお願いします。

除夜の鐘・参加者予約受付中（一打千円・予約優先）

大晦日 十一時開門―十一時半打ち始め

引き続き、本堂にて新年祈禱をお勤めします。

鐘撞きを予約された方のみご参列いただけます。

大般若祈禱会のお知らせ

令和六年一月十四日（日）、午後一時より大般若祈禱会を開き、家内安全・身体健全・商売繁盛等を祈念します。どなたでも（檀家以外の方も）祈禱を受け付けます。願文を添えてお申し込みください。

第一回目は禅師のご生涯を紹介してまいります。

慈母との深い因縁

禅師の生い立ちを語るとき、最初に申し上げたいのはお母様とお婆様についてです。お母様のお母様であるお婆様は法名を「明智優婆夷」といい、道元禅師が中国から帰国したときの最初の女性信者でありました。つまり、禅師はお婆様を通じて道元禅師との宿縁があつたのです。また、お母様は法名を「懐観大姉」といい、熱心な観音信仰に生きた人でした。禅師は終生観音様を篤く信仰されましたが、それはお母様の影響によるものなのです。禅師の「円通院縁起」という文書の中に、次のような逸話があります。

円通院のご本尊は、慈母（慈悲深い禅師の母）がいつも傍に置いてお護りしていた十一面観音様です。この観音様の由来は、慈母が十八歳の時、お婆様と七、八年間離れ離れになりました。お婆様の行方が分からなくなり、たいそう心を痛めておりました。そこで、京都の清水寺の観音様に参詣し、どうか母親（明智優婆夷）の所在をお知らせ頂

たいと祈願し、七日間毎日お参りをしました。

すると不思議なことに六日目参詣の帰り、道の傍らに十一面の頭部が置かれてあるのに気付きました。そこで慈母は「もし母に巡り会うことが出来たならば、下のお体をお造りし、一生私のご本尊として礼拝申し上げます」と発願し、この頭部の観音様を持ち帰りました。

果たしてその翌日、七日目に清水寺へ参詣した道すがら、遂に母親と行き会うことが出来たのでした。まさに十一面観音様が両者を引き逢わせてくれたものと言えましょう。慈母は早速仏師に依頼して観音様のお体を造り、以来ご自身一生護持頂戴のご本尊としてきました。

ちなみに、この観音様は現在も石川県の永光寺で大切に秘蔵されております。

さて、お母様が朝日の暖かい光を呑む夢を見て禅師を身ごもられたのは三十七歳のときでした。初めてのお子様ですから、ご両親はどんなにかご懐妊を喜ばれ、誕生を心待ちにしたことでしょう。しかし三十七歳といえは医学が進んだ現代でも高齢出産であり、無事に出産できるか母子共に案じられます。



永光寺本堂



十一面観音菩薩坐像（永光寺蔵）。お厨子の左右の扉には、風神・雷神、二十八部衆が描かれている。

禅師の場合は鎌倉時代のことですから、なおさら心配されたことでしょう。

そこで母親は一心に観音様をお願いをしました。「どうかお腹の子が元気に生まれてきて世のため人のためになりますように」。そして毎日観音経を読み、三千三百三十三回の礼拝を捧げました。

七ヶ月が過ぎた頃、いつものように観音様にお参りした帰りに産気づき出産されました。歩いている

ときに産気づいて生まれたので幼名を「行生」と名付けられました。場所は越前の多祢たねという地でした。ときに鎌倉時代の文永元年（一二六四）のこと。この多祢という地の所在は、越前市帆山町と坂井市丸岡町であるとすると二つの説があります。

ちなみに、道元禅師が八歳でお母様を亡くされたのに対し、瑩山禅師のお母様は八十七歳という長寿を保たれました。道元禅師は幼い頃お母様を亡くされたことで無常を感じられ、やがて出家を志すことに繋がりました。しかし、瑩山禅師は誕生から晩年に到るまで、いつもお母様の深い信仰と慈愛に支えられて成長されたのです。両禅師の生い立ち是对照的ですが、いずれも母親との深い慈愛を強く感じさせるものです。

出家、修行遍歴

やがて十三歳のときに永平寺に登り、当時三代目の

住職であった徹通義介禪師のもとで剃髪されました。また十七歳のときに永平寺二代目の住職孤雲懷奘禪師のもとで「作僧」(僧となる儀式)を受けました。永平寺に於いて、義介禪師と懷奘禪師のお二方から直接指導を受けられたこととなります。

永平寺に居る十歳のとき、文永十一年(一二七四)には第一回目の蒙古襲来があり、日本国中が騒然としました。

十九歳のときには大野の宝慶寺・寂円禪師に参じます。寂円禪師は中国の方で道元禪師を慕って来日し、永平寺よりさらに山奥の大野へ宝慶寺を開きました。禪師はここで修行をしているときに「菩提心を発して不退転の境地に到る」と述べられました。不退転の境地とは「不動の信仰が確立し、二度と後戻りすることのない境地に達した」ということです。

この頃に第二回目の蒙古襲来があり、山深い宝慶寺へも知らせは届いていたでしょう。この他、東山湛照、白雲慧暁、無本覚心など臨済系の禅匠にも参学しております。

二十二歳のときには「聞声悟道」されました。聞声悟道とは、「声(音)を聞いて道を悟る」ということです。修行に修行を重ねて、ある時ふとした音や

声によって悟るということです。

二十五歳のときには「観音の如く大悲闡提の弘誓願」を發されました。大悲闡提とは「自らは決して衆生より先に成仏しない」とする菩薩の大悲心です。翌年二十六歳のとき、義介禪師に従い加賀の大乗寺(金沢市)に移りました。

住職として

そして二十八歳のときに徳島県海部郡の城万寺の住職に迎えられました。どうして越前から遠く離れたこの地に禪師が赴かれたかは、現在も理由が判っておりません。義介禪師あるいは禪師ご自身の外護関係者からの御縁と想像されます。

四年後の三十二歳のときに義介禪師から「帰って来て欲しい」と呼び戻されました。既に七十七歳の老境に入られていた義介禪師にとっては禪師を傍に置いて補佐となし、後継者としての立場を明確にしたかったからと推測されます。

やがて機縁が熟し、禪師がお悟りを開くときが到来します。ある日、義介禪師は瑩山禪師に問いました。「あなたはどのように平常心を会得したか」。

答えて曰く、「道は知、不知に属しません」。

それを聞いた義介禪師は、「あなたは私を超える気概がある。必ず永平の宗旨を興隆するように」と。やがて三十五歳のときに大乘寺の第二代住職に就任し、永光寺に移るまで十九年間住職を勤められました。

大乘寺においては、三十七歳のときに『伝光録』の提唱を始められました。これは、お釈迦様から始まり祖父の懐契禪師に到るまで、歴代仏祖のお悟りの機縁を紹介し、提唱（説法）したものをまとめたものです。

現在、『伝光録』は道元禪師の『正法眼蔵』とともに、曹洞宗の「二大聖典」と称されております。そのコンセプトは「お釈迦様の悟りが時空を超えて自分たちになで伝わり、今も共有されているのだ」という認識・確信を伝えるところにあつたのでしよう。

このような大乘寺に於ける禪師の活動は、次第に世の人々にも聞こえるところとなり、道を志す人々が大勢膝下に集まってきました。中でも特に明峰様と峨山様のお二人が高弟としてその後の曹洞宗の発展に多大な功績を残しました。

四十九歳の春に、禪師は信者から土地の寄進を受けて石川県羽咋市に永光寺を開創することになりました。

した。禪師はこの地をこよなく愛され、ご自身の終焉の地ならびに遺骨を安置する塔頭所と決められました。五十四歳のときには永光寺の方丈を建立し、初めて結制安居を行いました。更に本堂後方の山に登った処に墳墓を築き、そこにご自身の遺骨に加え、道元禪師や義介禪師などの遺物を埋め、「五老峰」と称して門下で大切に護っていくよう定められました。

永光寺の住職を勤めること四年。五十八歳のときに奥能登の地へ諸嶽山總持寺を開創されましたが、三年後には峨山様に譲られ、再び永光寺に戻られました。

最晩年に到つて禪師は「生まれ変わつても衆生を救済する」と「多くの女性を救う菩薩になる」との誓いを立てられました。これを「金剛の二願心」と称しています。これも信仰心の篤かつたお母様の影響によるものでしょう。

ご遷化（お亡くなり）

正中二年（一三二五）死期を自覚された禪師は門下以後のことを示されました。八月十五日夜半、弟子たちへ「私の化縁は尽きた。涅槃の時がきた」と

いい、沐浴し鐘を鳴らして別れの言葉を述べ、

自耕自作閑田地

(自ら耕し自ら種をまいて

仏法の田畑を育ててきた)

幾度売来買去新

(この田畑が豊かに実り日々に新しくなっている)

無限靈苗種熟脱

(無数の優れた苗へ優れた弟子たちへ)

見事に芽を出し育って熟成した)

法堂上見挿鎌人

(これからも本堂を黙々と耕す人々へその教えを

継ぎ広める人へ)が続々と現れることであろう)

と遺言を書き終わると亡くなられました。

齢六十二歳でした。

その後、弟子の峨山様のもとで總持寺は多くの門下を育成し、その教えを全国に布教展開し、江戸時代には曹洞宗の寺院数は一万八千か寺に達しました。

日本最大の仏教伝統教団へ発展する基盤をつくられた瑩山禪師の偉大なご生涯は、こうして静かにその幕を閉じたのでした。

現在、總持寺は永平寺とともに曹洞宗の大本山としての寺格と威厳を保ち、瑩山禪師を太祖常濟大師として尊崇されております。

また永光寺も禪師寂滅後は明峰様が後を継ぎ、幾多の歴史の変遷を経ながらも歴代よく仏法と伽藍を相承し、今日に至るまで總持寺と並ぶ神聖かつ重要な古刹としての風格と地位を伝えております。

来年は瑩山禪師の滅後七百年大遠忌に当たり、大本山總持寺はもとより全国各地や海外の寺院で、報恩法要やさまざまな記念行事が奉修されます。合掌

★年齢は「数え」で記しています。また行状時の年齢については諸説が存します。

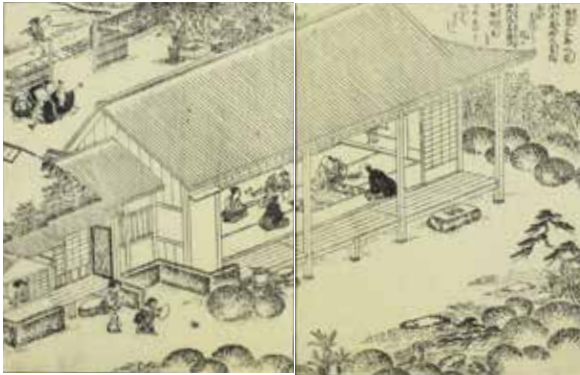
(次回は瑩山禪師の教えと誓願について)

開基鈴木九郎祖先の地、鈴木屋敷再建の報告

成願寺の開基は、紀州熊野神社の神職をしていた鈴木氏の子孫、鈴木九郎です。九郎の苗字「鈴木姓」は、現在は全国で二番目に多い苗字。そのルーツは、平安時代に熊野から藤白(和歌山県海南市)に



復元された「鈴木屋敷」



江戸時代の地誌「紀伊国名所図会」に描かれた「鈴木屋敷」(早稲田大学図書館蔵)

移り住んだ豪族といわれています。鈴木氏は、藤白王子(現・藤白神社)を拠点に熊野信仰を全国に広め、三千三百と言われる熊野神社を各地に建立しました。全国に鈴木姓が多いのは、このことが由縁となりました。鈴木九郎も紀州熊野三山より十二所権現をうつして祠った(現・新宿十二社熊野神社)と伝わっています。

鈴木氏宗家のお屋敷は「鈴木屋敷」と呼ばれましたが、昭和十七(一九三七)年に百二十二代当主が亡くなり、以降長年にわたって空き家となり、傷みが激しくなっていました。

転機が訪れたのは平成二十七年(二〇一五)年で、熊野参詣道紀伊路の追加指定地域として藤白王子跡(藤白神社境内、鈴木屋敷跡)が国史跡に指定。これを受けて海南市が「鈴木屋敷」

の復元を計画し、ふるさと納税型クラウドファンディングや全国の「鈴木姓」の方より寄付を募り、鈴木屋敷の再生・復元工事が進められ、去る三月三十日に竣工式が挙行されました。

成願寺も開基鈴木九郎の祖先の故郷、ルーツである「鈴木屋敷」復元の計画に賛同し、寄付協力をいたしました。

「鈴木屋敷」は一般に公開していません。十時～十六時、月曜・火曜休館(祝日を除く)、拝観料三百円。

山内短信

◎年始め「初観音」のお知らせ

令和六年一月十八日（木）午後二時より、新年初の観音様の祈禱会を行います。お札をお授けします。一月十五日までに願文を添えてお申し込みください。ご祈禱の後はお汁粉で懇親会です。会費二五〇〇円

◎東京工芸大学の学生さん、映画の撮影に来山

当山と同じ町内にある東京工芸大学は、日本で最初の写真を専門とする高等教育機関としてスタートし、今年創立百周年を迎えられました。

芸術学部映像学科映画領域（高山隆一教授・景山貴史教授）の学生さん方より、卒業制作の撮影に和室をいただいた



書院は民宿の設定となりました



撮影の段取りを確認する学生の皆さん

いとの申し入れがあり、協力させていただきました。

学生さん全員がそれぞれオリジナルの脚本を執筆し、選ばれた作品「日の当たる処」（監督、脚本・前川琉奈さん）を撮影。当日は二十五名の学生さんが、監督、プロデューサー、演出、美術、照明などの役割で動き、他に俳優さん、メイクさんもいらして、本格的な撮影となりました。当山以外も含め六日かけて撮影を行い、三十分の作品に仕上げたそうです。

◎彼岸会恒例、講談の報告

九月二十三日（土）、秋彼岸法要の前に、講談師・日向ひまわり師による高座がつとめられました。

演目は「清水の次郎長外伝・清水の小政」。次郎長親分の片腕として知られる小政の幼少期は、母親思いで、ちゃっかり者。次郎長・石松、小政と演じるひまわり師の豊かな表情と声音に引き込まれたひとときでした。



檀信徒の皆様へ 万がご不幸があった際のお願ひ
葬儀の導師を勤める任職の体力を鑑み、式はできる限り成願寺にて執り行うようお願いしています。まずは、ご相談ください。